

2003年5月26日三陸南地震築館地滑り時の下流民家の住民（60歳代男性）の証言

「地震（6時24分ころ）がきたのであわてて外にでたら竹林の裏の山が盛り上がった。土と水が一緒になって押し寄せてきた。（写真-1）おばあさんが庭にいたので助けようとして捕まえ、自分も流されまいと家の窓にしがみついた。泥は自分の首のところまできたが流されずにすんだ。おばあさんは頭の上まで浸かったが、揺すったら簡単に泥から引き揚げることができ無事だった。泥は家のガラス窓の中間の高さまで来たが、ガラスは割れなかった（写真-2参照）。滑りはそれからしばらく何回も続いた。」



写真-1 地滑り全景（印が証言者の住居）



写真-2 被災当時の状況

以上より、滑りは地震中に始まったが、揺れが収まってもしばらくの間繰り返したようである。地滑りを起こした土地は昭和40年代に沢地を埋めて造成した土地で、最近では荒地になっていたとのこと。1978年の宮城県沖地震の時は何事もなかったようである。滑った地山の土は特に左岸側は地下水位が高く、足で振動を加えても簡単に液状化する状態であった（写真-3参照）。地震の震動で液状化し地表の竹林や灌木を載せたまま下の田圃まで流動したことがその原因と思われる。田圃での流動堆積土塊の先端付近には5～6カ所に分かれて竹林がまだ自立した状態で散在していた。また、流動堆積土塊左側には土塊下部で滑り層の役割を担ったと思われる液状化土が20cm程度の層厚で田圃の面数十メートルにわたり薄く覆っているのが観察された（写真-4参照）。なお、当研究室では現在ブロックサンプリング試料による三軸液状化・非排水強度試験を実施中である。



写真 - 3 左岸側地山の状況（足で振動を加えると容易に液状化）



写真 - 4 流動堆積土塊左側で見られた液状化土と思われる細砂